

# 福岡県小学校

# 校長会報

## もつと身近に、福岡県小学校長会

福岡県小学校長会 会長 木下伸生  
(糸島市立可也小学校長)



学校の木下伸生と申します。どうぞよろしくお  
願い致します。

さて、新型コロナウイルス感染症が広まりま  
して、三回目の春を迎えました。広がり始めま  
した令和元年度当初は、二、三年で収束するだ  
ろう、という見通しがもたれていました。しか  
し、現在まで、デルタ株やオミクロン株といっ  
た新たな変異株の発生とともに、拡大と収束を  
繰り返しています。三年目を迎えますが収束の  
見通しが立っていないのが現状のように思われ  
ます。社会生活のみならず、学校の現場でも、  
令和元年度の臨時休校から教育活動が一変して  
いることと思います。「人をはじめとする、社  
会と接することに対する制限」は大きな枷とな  
り、様々な教育活動が中止もしくは変更を余儀  
なくされています。

このことは、県校長会の活動についても同じ  
ことが言えます。新型コロナウイルス感染症の  
影響を受け、八月に実施していた県校長研修会  
や二年次校長研修会は、ここ二年間、中止とな  
っています。さらに昨年度は皆様の御協力で準  
備を整えてきた九州地区小学校長協議会研究大  
会福岡大会も、残念ながら誌上開催となつてし  
まいました。

また、一連の教育改革も、新型コロナウイル  
ス感染症の影響を受けて、令和の日本型教育の  
GIGAスクール構想は前倒しでの実施とな  
り、整備や実施状況に格差が生じています。ま  
た、三十五人学級も段階的に実施となりました  
が、それに伴う施設設備や人員の不足、という  
課題も生じています。さらには、大量退職・大  
量採用に伴う人材育成、やりがいのある職場環  
境づくりや教職員が子どもと向き合う時間を確  
保するための働き方改革の実施と、課題は山積  
しています。

このような現在、県小学校長会では、その存  
在意義を問われている、と考えています。何の  
ために小学校長会があり、どんな活動をどのよ  
うに行っていけばよいのか、を考える機会とな  
っています。県校長会事務局では、新型コロナ  
ウイルス感染症に係るこの状況を、マイナスト  
考えず、むしろプラスと考えて活動していくこ  
とを確認しています。そのことを踏まえ、本年  
度のスローガンを、「もつと身近に、福岡県小学  
校長会」として、活動を進めてまいります。

具体的には、リモートでの福岡県小学校長会  
研修会や二年次校長研修会の実施、県小学校長  
会のホームページの活用（国や県の動向などの  
情報提供やアンケートの実施、集計結果の提  
示）などです。

また、令和七度の全連小大会の開催に向けて  
の取組も始めてまいります。

コロナ禍も三年目を迎え、今までの活動を踏  
まえたうえで、活動をさらに充実させていく所  
存です。御理解、御協力をどうぞよろしくお願  
い致します。

発行人

福岡県小学校長会  
会長 木下伸生

事務局

〒812-0053 福岡市東区箱崎2丁目52番1号  
福岡リーセントホテル1階  
TEL (092) 292-2292 FAX (092) 292-2294

## 退任副会長挨拶

### 副会長退任にあたって

前副会長（福岡地区） 横川 哲朗

令和三年度、福岡地区小学校長会長、福岡県小学校長会副会長の役を賜りました。

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症が拡大と収束を繰り返すことにより、教育活動の制限が強化と緩和を繰り返すこととなりました。このような状況下、福岡県小学校長会渡邊正則会長をはじめ事務局幹事会・三部幹事会の校長先生方のご尽力により、全国連合小学校長会、九州地区小学校長協議会などの最新情報を提供いただき、各地区の学校経営に生かすことができました。中でも、全国連合小学校長会を中心に組織的に、教員免許更新制の廃止、三十五人学級の推進、働き方改革など教育環境の改善、特別支援学級の定数見直し、GIGAスクール構想に向けて要望にもご尽力いただいていることなど、この役職を経験したことであくさん学ぶことができました。全国連合小学校長会大字弘一郎会長のご講話を伺えるという大変貴重な時間もいただきました。

しかし、このコロナ禍で、校長の研修の機会、情報交換の機会がただけなくなりましたことでしょうか。こんな時だからこそ、「校長の学びを止めない県小学校長会」として、ウィズ・アフターコロナに向け、試行錯誤を繰り返しながら「新たな形」を求めて創意工夫の活動を生

み出してあり、後輩に伝える必要性を感じたところです。

最後になりましたが、今後の福岡県小学校長会の充実、発展を祈念いたしますと共に、この会を支えてくださっている方々に感謝申し上げます。ありがとうございます。

### 副会長退任にあたって

前副会長（北筑後地区） 伏貫 義樹

令和三年度、うきは市、朝倉市、朝倉郡、小郡市・三井郡、久留米市の五地区で構成される北筑後地区小学校長会長の役職とともに、副会長として福岡県小学校長会に関わらせていただきました。コロナ禍でオンラインでの参加もありましたが、県や北筑後の様々な会議等で、多くの学びを得ることができました。また、校長会として関わっている組織等が多岐にわたっていることを再認識した一年でもありました。

各地区においても校長先生方が数多くの役割を担ってありますが、自校の学校経営はもちろん、今更ながら、校長としての守備範囲の広さと責任の重さを感じるところです。そして、その組織は、市町村、地区、福岡県、九州地区、全国連合とつながり、小学校教育の充実・発展のため、研究と実践を重ねるとともに教育条件の整備に努め、多大な成果をあげてきています。

本年度はコロナ禍のため、残念ながら、九小協福岡大会や北筑後地区小学校長会研究大会な

ど、誌上開催となりましたが、会議に参加する中で、これまで準備に携わってこられた方々のたくさんのお思いにふれることもできました。地区会長・県副会長という機会をいただいたことで、本当に貴重な経験をさせていただくことができました。

改めまして、一年間ご指導・ご支援いただきました渡邊正則会長をはじめ、県小学校長会事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。

最後になりますが、今後の福岡県小学校長会のみならずの充実・発展と県下の校長先生方のご活躍を心から願っております。本当にありがとうございました。

### 退任の挨拶

前副会長（南筑後地区） 本田 透

退任にあたり、ご挨拶申し上げます。

この一年、学校では子どもたちの日常生活や学習が様々な制約をうけてきました。短縮授業や学級閉鎖への対応、オンライン授業の開始、感染防止対策の長期化といった想定しなかった事態に直面してきました。

コロナ禍での教育課程や学校行事の変更に伴う効果的な実施や最適化、タブレットの活用の工夫、教育活動の発信や地域連携など、真に「子どもたちの安全を守り、学びを止めない。」を体現した一年でした。また、九小大会や地区研究大会は、本来の開催は叶いませんでしたが、校長会の活性化や学校運営、教育環

境の充実などについてたくさんのご示唆をいただきました。

これまでになく、真剣に直面した学校課題について校長会で議論を重ねました。「ピンチをチャンスに変える」ための危機管理のスキル、学校組織の意識と一体感は間違いなく向上したものと感じています。

福岡県小学校長会の渡邊会長様をはじめ、運営の中核となっていたいただいた事務局、小学校長会事務局の皆様方に心からお礼申し上げます。

「校長会だからこそできることは何か」を銘文として取組の改善を図っていきたくと存じます。お世話になりました。

福岡県小学校長会の今後ますますのご発展を祈念致しまして退任の挨拶とさせていただきます。

## 副会長退任にあたって

前副会長（筑豊地区） 白石 毅

この度退任させていただくにあたり一言ご挨拶を申し上げます。一年間の在任中、皆様方には大変お世話になりました。至らない点ばかりではありましたが、コロナ禍の中で何とか任期を終えることができるのは、県校長会への皆様方のご協力と自校でのご奮闘があったからこそだと実感しており、心より感謝申し上げます。

昨年来、会員様各校では大変なご苦労をお重ねのことと拝察致します。本年度は中盤を越え、やつとトンネルの出口が見え出したのかと

思った矢先、再び昨年度以上の試練の大波がやってきております。未だその渦中で、皆様日々様々な「決定」をされ続けていることだと思えます。

本年度の九州大会兼県大会は、以前からの膨大な準備にもかかわらず、集合開催は叶いませんでした。経緯の中で、会長・幹事長様をはじめ、役員や事務局の皆様のご尽力と決定のご苦労はいかほどであったかと頭が下がる思いです。

これまでのスタンダードが塗り替えられ、「当たり前」「普通」と考えられてきたことに変革が求められている今、一口に決定と言ってもより柔軟な発想力・想像力による「発案」と「決断」が求められています。福岡県の新スタンダードづくりは、会員一人一人の発想と決断の集積によつて組み上がっていくのでしょうか。

私自身はこの一年間何もできておりませんが、この任に就かせていただいたことは大変貴重な経験でありました。この経験を糧に、残りの時間を県校長会員として恥じぬよう邁進して行く所存です。最後に、福岡県校長会のますますの発展を祈念し、退任の挨拶とさせていただきます。一年間、誠にありがとうございました。

## 副会長退任にあたって

前副会長（北九州地区） 林 進一朗

昨年三月の臨時休校から始まって多くの学校行事が縮小・中止・延期され、今まで誰もが経

験したことがない二年間でした。そのような中、令和三年度、北九州地区小学校長会長、県小学校長会副会長を務めさせていただきました。

思い返せば、四月十二日、福岡県小学校長会の活動として、第一回地区会長研修会に出席させていただきました。活動内容も十分に把握していない中、副会長としての責務を感じながら役員の校長先生方の話をうかがいました。本年度福岡県で開催予定であった九小協大会について、綿密な計画が練られ、この大会にかける校長先生方の熱意を感じました。結果的には、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため紙上報告となりましたが、九小協大会開催に対して打ち合わせや資料作成に膨大な時間をかけられたことに、尊敬の念に堪えません。

今もなおコロナ禍の終息は見えてきませんが、その中で私たちが学んだことがあります。それは、エッセンシャルワーカーと呼ばれる人たちははじめとして、私たちを支えてくださっている人への感謝の気持ちです。何事にも支えてくださっている人がいます。今年度、県小学校長会の仕事に関わらせていただいて今まで校長として自校の学校経営を行う中で、見えてこなかったものに気付かされました。福岡県内における調査研究活動、教職員の資質・能力の向上、処遇改善等に尽力された渡邊会長をはじめ県小学校長会事務局や役員の先生方に感謝を申し上げます。これからも厳しい状況が続くと思われませんが、福岡県小学校長会の充実・発展を心より願っています。

## 副会長退任にあたって

前副会長（京築地区） 佐藤 佐代子

令和三年度の京築地区校長会長、県小学校長会副会長として県小学校長会に関わらせていただきました。

この一年間も新型コロナウイルスの収束の見通しがたらず、これまでの当たり前にできていたことに制限がかけられる状況が続きました。そして、この大きな社会の変動に学校の生活様式にも変化が求められてきました。特にGIGAスクール構想による、人とICTが効果的に協働し「主体的・対話的で深い学び」を実現していく学校教育が新たな日常となりつつあります。

県小学校長会に関わらせていただいたことは、コロナ禍といった予測困難な状況を乗り越える組織運営の在り方について学ぶ意義深い一年間であったと振り返ります。九州地区小学校長協議会研究大会や県大会の安全な開催、そして、各部署の活動の維持・継続のために、渡邊会長をはじめ役員、事務局の皆様の適切で迅速な対応は、地区校長会や市校長会の運営に繋がる学びとなりました。

特に、どんな困難な状況にあっても、まず自ら考え仲間と共に知恵を出し合い協働で乗り越えることの大切さは、コロナ禍における組織運営の指針となっています。例えば、健康・安全に係る事案について、リモート会議を重ね、対策を見出しながら解決にあたることができました。また、教育委員会や中学校長会とも情報を

共有化することで、関係機関と連携した一貫性ある対応を図ることができました。

危機的な状況の今だからこそ、これらの貴重な学びを生かしながら、今後も一歩ずつ前進していきたいと考えています。

最後になりましたが、副会長の職を通して出会わせていただきましたすべての皆様に深く感謝申し上げますとともに、本会のますますの充実、発展を祈念いたしまして退任の挨拶とさせていただきます。

## 特集

### 新任校長について

## 学びと集いの喜びあふれる

### 河東小学校に

宗像市立河東小学校長 安河内 友美

本校は、明治二十三年に新町村分号により各区の小学簡易科が併合され河東小学校簡易科となつて以来、長きにわたり地域に支えられ、愛される学校として存在しています。平成二十二年度には宗像市教育委員会から「小中一貫教育調査研究校」として二年間の研究指定・委嘱を受け、河東中学校区（河東小学校・河東西小学校・河東中学校）の児童生徒のよりよい成長を目指し、調査研究を行いました。三校の教職員が共通の目標を掲げ校種を超えて交流・協働し、授業改善や児童生徒間交流を充実させることで、九か年の円滑で効果的な子ども

の育成を充実させてきました。本年度からは、宗像市小中一貫コミュニティ・

スクールとして、保護者や地域の方々とともに目標を共有し、子どもたちはもと

より、校区の方々や地域の元気や幸せにつないでいけるよう励んでいきたいと考えています。

かとう学園（河東小学校・河東西小学校・河東中学校）では昨年度から「夢と志をもち、自ら学び実践し力強く未来を切り拓く児童生徒の育成」を教育目標に掲げています。これからの先行き不透明で予測できない様々な変化が想定される社会に生きていく子どもは、自分のよさや可能性を認識し、自力で歩みを進めるとともに、他者を価値のある存在として尊重し、協働しながら個人と社会の幸せを実現させていく力を備えることが重要であると考えます。

そのためには、与えられた環境下で教えてもらうのを待つのではなく、子ども自らが主体的に「探索」「挑戦」し、実感を伴った価値ある学びをすることが必要です。かとう学園では、児童生徒自らが目標を設定し、振り返りながら行動すること【自己調整能力】や互いを尊重し、関わりあい、つながりあうこと【対話（協



【「校章10の力」で出迎える河東小学校の正面玄関】

働)力」に重点を置き、教育活動にあたっています。「探索」「挑戦」に向かうには、自ら追究・達成したい目標や目的、そして、勇気が必要です。教職員一丸となつて、魅力ある教育課程や子どもたちを支える環境をつくり、伴走をする最強の「応援団」となれるように、そして、子どもたちに心からの笑顔と未来に生きて働く力を宿していけるよう努めていきたいと思つています。

さて、コロナ禍により、三校の教職員が集い、研修や協議を行う機会や保護者や地域の方々との懇談や参観いただく機会が随分と減りましたが、学校と家庭、地域の方々が手を取り合うことで子どもを取り巻く環境に温かさときめ細かさが増すことは言うまでもありません。物質的な距離はとりつつも、情報のやり取りや心の通い合いは密にしていきたいと考えます。そして、子どもたちの育ちを語り合う過程で、子どもを取り巻く教職員や保護者、地域の方々も、集い、言葉や思いを伝え合うことのよさや、自他のよさを実感し、元氣と幸せな思いが広がっていくことを切に願っています。

## 竹野小学校の 新たな伝統を築くために

久留米市立竹野小学校長 安藤 俊 貴

「校長職を楽しんでください」

前任の校長先生からいただいた言葉です。この言葉の意味の一つとして、新任校長の私に対して、「まずは、四月から肩の力を抜いて、学校経営を行う」ということを温かいお気持ちで伝えていただいたのではないかと、思っています。今後も、この言葉を大切にして、学校経営を行っていききたいと思えます。

また、先日の学校訪問では、「前任の校長から経営のバトンを渡されましたね。頑張ってください」というお言葉をいただきました。副校長、教頭職だった時の校長先生が行われていた学校経営を参考にさせてもらいながら、自分なりに工夫をして学校経営を行いたいと思つています。

まずは、「シンプル」「オープン」「スピード」のアルファベットの頭文字をとって、「SOS」の精神で校長業務に取り組んでいきたいと考えています。そして、安心安全な学校づくりを目指していきたいと思えます。今年度は、その一つとして、通学路の一部に危険箇所があることがわかったので、PTA役員さん方と協議して、五月から通行する歩道の一部変更を行う取組を行います。



【藍(あい)の織物とヒナモロコ】

た。

次に、学校経営の面では、「風通しのよい職場環境づくり」と「お互いに信頼できる温かい人間関係づくり」を心掛けています。そして、全ての職員が、笑顔で元気に子どもたちと向かい合えることが、一番大切と考えています。そのため、コミュニケーションをお互い、しっかりとることを心掛けています。

玄関には、本校の特色ある教育活動を伝えている「ようこそ 藍(あい)とヒナモロコの里 竹野へ」の看板を掲げています。藍は、三年生の手で種まきから行います。育てた藍の葉をついで、藍の生葉染めをします。最後に、藍の種取りをします。六年生は、藍染めした糸を使って、久留米紺の創作を行います。また、平成六年に竹野校区内の河川で絶滅寸前の魚「ヒナモロコ」が竹野小学校の児童に発見されました。それからは、学校でヒナモロコを飼育したり、放流活動をしたりしています。

しかし、学校だけでは、これらの教育活動はできません。保護者、地域の方々との連携・協力のおかげで進めていくことができています。そして、これらの取組は、校長だけではできません。職員との課題の共有と組織的協働実践が不可欠です。そのために、まず、教頭、主幹教諭としっかり連携協力していくことが一番大切と考えています。そこで、週一回、校長、教頭、主幹教諭で三者会議を行い、情報共有をできるようにしました。また、三部会や運営委員会を活用して、先生方に組織への参画意識を高めもらうようにしています。

このようにして、職員と気持ちを一つにして今年度の重点目標「主体的に学び、笑顔あふれる子どもの育成」を目指すともに、校長として職員に重点目標の意味をしっかりと伝えていき、引き継いだバトンを大切にしながら、竹野小学校の新たな伝統を築いていきたいと思えます。

## 児童と職員が生き生きと学べる 学校経営を目指して

柳川市立垂見小学校長 戸塚 辰也

本校は、田園風景が広がる場所に位置し、すべての学年が単学級の小規模の学校である。児童は、素直で挨拶をよくし、外遊びもよくする。また、毎日の登下校では、地域の方の見守り活動があり、地域との関わりが深い学校であるためか、学校全体が大変落ち着いている。

職員構成は、学級担任のほとんどが教職経験が少ない若年層であり、授業力の改善と学級経営力の強化は喫緊の課題でもある。

そこで、新任校長として、チーム垂見小として、教職員のベクトルをそろえ、指導の徹底を図り、「全職員が自分事としてすべての子どもの教育に責任を持つ」ことを経営の重点として取り組んでいきたいと考える。

そのため、校長として取り組んでいることは、  
①目指す児童像や授業像を具体的に説明し職員で共有する場を大切にする

②教頭、主幹教諭との三者会で、情報の共有と課題への方策を練る

③授業改善と学級経営について、担任のサポート体制を整える

④保護者や地域へ教育活動の情報の公開と理解を得る

まず、経営方針や重点目標を四月当初に説明するだけでなく、校内研修や終礼、個別に具体的に説明する機会を設けるようにしている。若年層の多い中で、教職員のベクトルをそろえるためには必要なことであり、職員とのやりとりの中で目標を共通理解することを大切にしている。

次に、重点目標を教室まで届けることや授業の質的管理を行うために、教頭と主幹教諭との三者会で重点目標達成を目指した「育成部会」と学級の状況の情報の共有及び課題への方策の協議を行う。教頭は、組織運営と人材育成から、主幹教諭は、校内研修と教育課程から協議内容の情報提供と方策の提案を行うようにしている。協議を通して、意思の疎通と指導を徹底するための方策を教頭と主幹教諭が具申できるように心がけている。

更に、学級担任が孤立しないサポート体制づくりを行う。学級担任の意向を大切にしながら、教育支援員の配置や教室訪問後の指導、生徒指導への早期・組織対応を教頭や主幹教諭、担当者が自ら判断して行動できる環境づくりを大切にしている。

最後に、コロナ禍であるからこそ、積極的に学校の情報を学校だよりや学校運営協議会等で保護者や地域に公開し、教育活動への理解と協力を得られるようにしている。

校長として、職員に対して奉仕の気持ちをも

って接し、どうすれば組織のメンバーのもつ力を最大限に発揮できるか考え、その環境づくりを行うことを経営の理念としたい。

そして、地域に信頼される学校づくりと児童と職員が生き生きと学べ、通いたくなる学校づくりを目指していきたい。

## 「自律した子ども」の育成を目指して

添田町立落合小学校長 長畑 理恵

本校は、百五十年近くの歴史を持つ全校児童二十名の小さな学校です。福岡県と大分県の県境にある霊峰、英彦山の麓で大自然の恵みを受けながら、地域・家庭・学校がそれぞれ役割を果たし、教育活動を展開しています。子どもたちは、心豊かで伸びやかに育っていると感じます。特徴的な教育活動としては、英彦山の山伏に

ちなんだ、「こてんぐ隊」を

結成し、豊かな自然や歴史、文化を学びながら、地域の魅力を再発見させ、郷土愛を育て

ていることであります。また、日常の活動としては、毎朝の



【地域の田んぼで田植えの体験】

登校時間に地域の方が、自宅前で子どもたちを見守ってくださったり、集団登校に付き添ってくださったりしていることです。どちらも地域に根付いた、良さが感じられます。

しかし反面、小規模校ならではの課題も少なくありません。一学級の児童が平均四名という少人数であることから、きめ細かで一人一人にじっくりと向き合った指導が可能です。しかし、少人数であるが故に、同年代との関わりや集団・大人数の中で他者と関わりを持つ機会が少なく語彙力の不足や意見交流の不足による広い視野の育成やコミュニケーション力の育成に不安を感じずにはおられません。特に、コロナ禍で保育園児や高齢者との交流もままならず、一段とその機会を無くしてしまっている事は活用力の定着に課題があることにつながっている要因の一つではないかと推測しています。

三年後には、四小学校の合併が決定しています。子どもたちは、否が応でも大人数の同年代の子どもたちと生活を共にしなければなりません。せめて残り三年間、ウィロコナの工夫を怠らず、体験や交流の機会を多くもち「地域の学校」を目指していきたいと考えています。

以上のような理由から、本年度の学校教育目標を「ふるさとを愛し、豊かな心を育み、自ら学び、たくましく生きる子どもの育成」、経営の重点を「小規模校・地域の良さを活かした教育課程の創造」としています。

日本の社会全体がサービス産業化したために若者たちには当事者意識が欠如していると言われています。自分で考えず、過剰なサービスを

受けて育った子どもは、自分で何とかしようという思考回路が生まれにくいといえます。

児童数が少なく、先生方のきめ細かな行き届いた指導がなされている本校が、この社会の縮図とならないように、小規模校であり地域との関わりが深いからこそできる体験活動や学びの個別最適化の実施を心掛けたいと思います。

教員集団には、自分で考え判断し、行動できるいわゆる「自律」した子どもを育てる意識を常に持ち、校内での職員研修に甘んじるのではなく、校外での研修等にも積極的に参加してほしいと思っています。

教員が力をつけ、考え抜かれた教育課程を設定・実施することが「自律した子ども」を育むことになると思います。小さな学校ですが、校長として軸をしっかりと持ち、先生・地域の方々と頑張っていきます。

### 全ては関係性の質の向上から

直方市立中泉小学校長 氏 本 射須身

初めて直方市に赴任しました。知らない町で知らない人と働く不安がありますが、教職員の皆さんにしてみれば「知らない人」が校長になるのですから、更に不安なことでしょう。

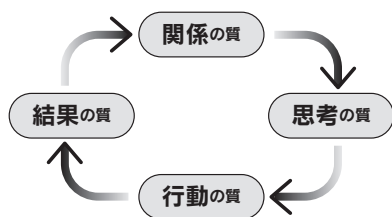
四月二日、学校経営構想を話してはみたものの、正に地に足が着いていないような感覚が残りました。そこで、という訳ではないのですが、教頭、主幹教諭と計画し、四月七日、始業式の午後ではありましたが、研修会を開きまし

た。内容は「目指す子ども像」。構想は話していましたが、具体的に「中泉小の目指す子ども」について、私がファシリテーターになり、教職員の皆さんがどのような姿を描いているのか対話的に進めました。参加者全員が考えを言葉にし、結果的には学校の重点目標を具体的に共有する一歩となりました。

組織は往々にして、まず結果やそれに直結する行動の質を求めがちです。しかし、結果に対する圧力、特に数字への圧力に包まれると組織は疲弊し、関係性の質が悪化します。すると、互いの意思疎通は弱まり、チームとしての思考の質は下がります。そして、行動の質は下がり、結果も伸びにくくなります。

左の図は、結果の質を上げるためには、関係性の質を上げることから始めることが、いかに重要か説いたものです。関係性がよくなれば、やがてよい結果につながり、さらに「メンバーに恵まれている」という好循環が生まれるというモデルです。

では、どうすれば関係性の質が上がるのか。それは、対話を業務に位置付けることではないかと思っっています。先に述べた研修はその一つです。また、職員との面談は月に一程度実施する計画です。人は互いに話すことにより相互理解が深まり



【「成功循環モデル」ダニエル・キム】

ます。しかも、対話は話し合いの結果よりも、互いに聞き合う過程を重視するので、関係性の質を高めるには効果的です。

「関係性」や「対話」は授業改善の鍵にもしてほしいと提案しています。教師ばかりが多く話さず、子ども同士に対話が生まれる授業です。そして、求める教師像も改革してほしいと話しています。それは、一人で何でもできる教師ではなく、困っていることは人に頼り、協働できる教師です。

校長としての力量に乏しい私にできるリーダーシップは、失敗を曝け出すことです。それが腹を割って話し、協働の雰囲気を生まないかと思っています。そして、積極的に校内を歩き、立ち止まっては教職員と子どもを見つめ、何でも一緒にやってみることで、対話の内容も豊富にならないかと考えています。このようにして、チームの関係性の質を高めながら、本校の目指す児童像の実現を描いています。

## 地域と共にある学校を目指して

行橋市立椿市小学校長 立花 美香

椿市小学校は、平尾台南麓に位置する自然豊かな学校です。一学年十から十四人の単学級で、全校児童七十一人の小規模校です。学校教育に関する地域の関心は高く、協力的です。学校のすぐ近くには、公民館・認定こども園、放課後児童クラブが集合した地域交流センターがあり、地域の活動の拠点となっています。

私は、本年度初めて本校に赴任しました。昨年度は、同じ中学校区の中規模校で教頭として勤めていました。年度当初、その違いに戸惑うことも多くありました。しかし、歴代の校長先生方の地盤の基、小規模校の強みを生かした学校づくりに取り組んでいきたいと考えています。本校の強みは、「学校との繋がり」の強い地域」「学年を越えた連携のできる児童」そして「児童のために有ろうとする教職員」と考えます。

まず、学校との繋がり強い地域の特性を生かし、本年度よりコミュニティ・スクールとして立ち上げることができました。地域と一緒に行う「ふれあい運動会」や裏山での「梅ちぎり」「田植え」や「いもなえ植え」など、これまで地域との協働の活動は多くありました。しかし、コロナ禍にあつて、残念ながら活動を休止しているものも多くあります。今後は、学校運営協議会と連携して活動を組み立てていこうとしているところです。コミュニティ・スクール元年ですので、少しずつ取り組んでいきます。

次に、本校は、学年だけでなく、近接学年での活動を多く取り入れています。縦割り班での活動はコロナ禍で行えていませんので、早く活動を再開できるようになればと願っています。昼休みの運動場では異学年集団で遊んでいたり、高学年が進んで低学年のお世話をしたりしている微笑ましい姿を毎日見かけます。

そして教職員は、児童が生き生きと活動できるようにはどうしたらよいかを考え、教材研究をしたり、ICTを活用したりしています。児童の

学力としては、基礎学力の定着が不十分で、活用力に課題が見られます。そのため、分かる授業づくりに向け、算数の主題研究を中心に研修を進めています。一人一台のタブレットを活用することで、個に応じた指導を行っています。また、児童とのコミュニケーションを大事にしており、休み時間に一緒に遊んだりゆつくり話を聞いてあげていたりします。

これらの強みを、いかに引き出し、生かしていくかを考えることが私の使命だと捉えています。そのため、重点目標を「ICTを活用した授業改善と学力の向上」「学校・家庭・地域と連携した協働的な教育活動の構築」としました。

私は、地域や児童、教職員の声に耳を傾け、共に考えていける校長でありたいと思つています。まだまだ活動が制限されている中ですが、今何ができるか、どうやったらできるかを考えていきたいと思つています。そして、七十一人の児童の伸びやかな笑顔を大切にしたい。地域と共に成長できる学校となるよう、リーダーシップを発揮していきたいと考えています。



【昼休みの運動場】